

源氏物語講義
若紫

子





若紫
 此卷ニ於て源が上
 をひそまよ迎へたり
 陸ひし兵部々の
 親王ハ乳母あかき
 たりんとのこもて、さ
 してばや上をさぐるも
 とめつらぬハ今の世
 此まきよしてハいと
 いづうきやうされ
 どかうやうのこい處
 時の風習や神釈よ
 ちびといこのお後の
 夕白浮舟るどを後
 てらして疑ふ處あり
 次といへし、

段落
 此卷ハ一大段八小段よ
 區別まべしを二小段
 よ於て、源瘧病の

源氏物語講義

若紫の卷 凡一大段八小段五十二節

此卷ハ源十八歳の三月上。まよあるまよのこと
 を叙せし。卷の名もまよとけきたる何ハ。ま
 よも何よもつこま。湘月抄の説のめく。源の
 歌みよつこま。いづうきやうされ。た
 る聖へのまき。とあるをとりて名づけしな
 る。新釈よ。若紫ハまき根を用ふる物あり
 糸を。まき根。おひよ伊勢物語よ。春日野のま
 きのまき根。とあるハ女をまき根とて若紫とい
 ふべきを。まきのまき根とて。まき根といふとみ
 ゆ。此まき根はまき根を何心する用ひて。ま
 つけし。まき根とて。まき根。新釈よ。まき根のま
 新釈のめくるまき根とあり。○この卷ハまき根の上を
 源がえをめぬひて。遂よひまき根とて。まき根の
 まき根の一段。まき根をまき根の上を言と。次ハ源の
 瘧病也。ハ山の聖加持のこと。後壺は悩まて内裡よ
 り退出のまき根。并ハ懐妊乃こと叙し。源の後
 壺は密通のまき根。始めてあまき根とて。まき根の
 聖のまき根。源が帝へ奏し。まき根。聖のまき根。

このまき根



あつて... 好色の筋と思はれて、ハとおぼしめての... 好色のまゝに... 母の... 兵部... 尼妻の女... 婿をう...

まめやうよ... 推量... 女死す... 父の本意... 養育... 兵部... 婿... 尼妻... 婿をう...

○... 兵部... 尼妻... 婿をう...

ひづる物とめ... 源... 兵部... 尼妻... 婿をう...

とて〇たゞしつゝも
まじりてはるるも
のたまひに源のつま
るゝと〇召さんと少
細なるほどのやん

三小の才三節

げよこのやのちる人
を「尼」交ひぬる人
は為面はるる迷惑
とて〇うちつひま
うちつひまをソツジニ
あさそのハ海まき
初葉面よあさその
よ思一〇召さん序
ど〇〇佛のおのづ
らあまのあさその
らぬぬ〇〇〇〇
仏の照臨あまき
〇あさそのハ海まき
くハのたぢあまき

とて〇たゞしつゝも
まじりてはるるも
のたまひに源のつま
るゝと〇召さんと少
細なるほどのやん

とののびを。フツガウニ
段の才二節。尼交ひり源のつま
のうへをまきえのふ扱るり。げよこのやあまのこ
そうそまあめ。まめやのよの子かあけけはし。
とてあざりよまのり。うちつけよあさそのあま
りとあらんぜられぬべきついでるれど。ふよは
あまのあまえぬと
さめおほほを傳らぬを佛のおのづあらとておほほ
おとれしうらづあ。げあまのついでとてみよ
えうちあめらげよ思ひのよりがまきついで
よ。かきまどののせまをまきま。あまのい
あまのあま。あまのいけのあま。あまのい
あまのあま。あまのいけのあま。あまのい

母の母のつま
あまのあまのいけのあま。あまのい
いふあひあまのつまのよまひま。むつま。あまのい
よもあまのあまのいけのあま。あまのい
やうよて年月をこそあまのあまのいけのあま。あまのい
の。あまのいけのあま。あまのいけのあま。あまのい
ままのあまのいけのあま。あまのいけのあま。あまのい
ぼされんあまのいけのあま。あまのいけのあま。あまのい
こ色のあまのいけのあま。あまのいけのあま。あまのい
るあまのいけのあま。あまのいけのあま。あまのい
んとつひあまのいけのあま。あまのいけのあま。あまのい

源氏物語講義

出はうんげを信
 極花ハ登るれど花な
 じよ目ハ移らばと
 ○ときありてまは源
 うんげの登る傍の
 洞より似合たるをを
 あしとせしめてさう
 どんげのめくかゝる大徳
 をえなむか容易なら
 ぬ因縁ならんといふ○
 柳く山の直花のあは
 ハ係をさしていひま
 と奥山の松のたつづ
 ハ明もともちきをば
 夜ハ稀ハあけてだ
 こもちをさうつくしき
 花の白をみるぢやア
 と源の物知をのこ
 けるーとあやまらん

よ免了そうつらぬとせきめしバ源ほくあそとときあ
 りてひとあび飛らくなまふ。うんげのあめのをと
 の加持の聖ひびくはあはらけのりりそ。
 おく山の松のとぼを成すれよあけてままご
 ぬ花のあめをえんまあれ。とうちなきそとそま
 つる。ひびくはまもりーとこなる。うんげひて獨傍都聖
 徳太子のくざらよりえのりなる。金剛子珠数
 のうほのさうぞくしたるやがてそのくまより
 れあるをこのあめいけるをまきたるふくろよ
 いきてあまの枝よつけてあんまりのつぼたよ

十四号六

○このひてまは聖の
 独鉗まをさうて傍都
 も源は物知をのこ
 んまりのつぼは紺瑠璃
 の壺○なまこく古
 へハ物を人よなるま
 本の枝るまは付てま
 る。春のよをえられハ
 着梅の枝よ付てま
 なまこく○やまの山
 家人之山家人よま
 物被下ーと

あくはせりどまいきて源あさくらなまよつけと
 ころよつけるはあけりものどまきげなるよ
 ふまハひびくまよりまめと設経つるほうのふせ
 まうけのめれどまきふよとりよつらければ
 そのころりのやまが川までさるま物どもあまひは
 種るどして出給ふ三小段の才五節聖もまりて傍都聖よ
 うちよそうけり入のひてあのみまえ給ひーとまひび
 きこえぬどとらかうたがいまはまこえんあ
 る。まは源あそろざうあま今四五十年をまじ
 てこそハともかうもとのめをまるとおほじまはよ

源氏物語講義

このあは

二十二

まぐれの家門のあは
 花の色をさそひひま
 この上を下よふくめ
 たまへ、さハタさるよ
 は花の色をさそひひま
 と乾ハ霞の立て朦朧
 したるぬく思ひがふ
 とと○阿とよやの
 あをむるよふあふふ
 りをばりてそれとな
 く云とて、いひあまむ
 るをばりてわけたり、さ
 ハ城であらあ花のあ
 かりハ立ちきと岸の
 のふよふふも激
 ハあるましけれとそ
 けききをア見やう
 とん

三小の才七節

こあるを阿とよやのとおお阿とよやのを阿とよやのはせうそこそ阿とよやのの
 とあるちひさきい阿とよやのして。
阿とよやのれ阿とよやののあは花の色をさそひひまの
 たちぞとつらふはた。
阿とよやの花のあはらうい阿とよやのとあをむる
 のけききをかえんとよあるてのいとあてなるをうち
阿とよやのてあいまま阿とよやのり
阿とよやの車またてまるる福大教よりいつちともなくてお
 まよけることとて、阿とよやのへの人々公達などあま阿とよやの系
 りのり阿とよやの左中弁さぬ阿とよやのもあま阿とよやのひひ

阿迎の人々○あま
 まくおくらさせ
 云は源の清ひのいぬ
 を恨や、是ハ阿中弁
 左中弁等の中○い
 をかぐれの若のうへ
 岩陰の苔上○といよ
 らの寺のまゝるもや
 催馬樂をとりにてうた
 つらまのちのまへな
 るやとらの寺の西
 らま志つくやままら
 み志つくや細流ふ山
 寺まの使ありていと
 おか阿とよやのといへり
 ○人よりいとするも
 上なるれども源の阿前

てかやうの阿ともいつあうまう侍らんとおひひ
 ふるを阿とよやのくおくらさせぬと恨ま阿とよやの
阿とよやのいといまき花のあげよま阿とよやのやまら阿とよやの立あ
 へ侍らんいああぬい阿とよやののい阿とよやのの
 若のうへよな阿とよやのて阿とよやのけ阿とよやのおちく阿とよやのあ
 のさ阿とよやのあるど阿とよやのある阿とよやのの阿とよやの也阿とよやの阿中弁阿とよやのとこ阿とよやのな
 りける阿とよやの笛とり阿とよやのお阿とよやのふ阿とよやのま阿とよやのたり阿とよやの弁阿とよやのた阿とよやの扇阿とよやのを
阿とよやのあ阿とよやのわ阿とよやのう阿とよやのち阿とよやのなら阿とよやのして阿とよやのと阿とよやのらの寺阿とよやのれ阿とよやのる阿とよやのや
 と阿とよやのう阿とよやのふ阿とよやの人阿とよやのより阿とよやのい阿とよやのち阿とよやのなる阿とよやの阿源氏の阿とよやのま
阿とよやのい阿とよやのち阿とよやのち阿とよやのな阿とよやのや阿とよやのて阿とよやの岩阿とよやのより阿とよやのぬ阿とよやのま阿とよやのは阿とよやのあ

よてハけおきるとん
○例のひちりきふく
いつも供は筆葉持
て来る身身なるべし
○さうのふえゆいせ
たさ「是も身の中よ
笙を吹くなるべし」○
山のとりもさう上の
才五節は照る月孟
云、列子「瓠巴鼓琴瑟
鳥舞而鳴、魚躍而遊
矣」とあり○けよよ
あらげさう湖月よ上
手藝の志望よ志すべ
いぬよくき物なる誠
なるべしとあり

三小才八節

いふあひなきさう
ついでなるき法師
童までも僧教のう

ぐひるくゆエライ志きほありさ満よぞ。たうよどよめ
うつる満ぐりける。例のひちりきふくさうい志ん。
さうのふえゆいせたる風流人物などあり。僧都琴
んをうづあうりてまありて僧都れたほ手ひと川あ
そをうておるぐくは山あとりもおとらうり傳
らん。とせちよきささのい源のうのほひつ強め
がこきものをとせえあまうと。げよよくさうらげ
あきなうりて一同立去これうちまひぬ』三小段の才
のくく次中お左中弁など源の立去のふき七節へ。大板
所迎よまありぬふまう源の立去のふきあまをくちを七といふ
あひなきほう源の立去のふきらうらうらむるさうをとおとらあ

ちの衆へ○あつるほさ
備なるういとむづあ
しき日のものとき
急のよは旧注云上の
僧都のあは光源氏を
優曇華よとくわこととて輪
王の如サようせたり
あよ又僧都のほ相あ
さう○ああーのさひ
あつる僧都感涙あひ
とんひては上幼ま
心もほをめでたき
人チヤナアとんあひ
え○あひのほありさほ
よりもさう上ハほ
父兵部あのまありも
源をめでたしとんあひ
ふえ○あひの人のほあひ
あつるほの子よたり

へり。まうさうちう六年おあつるあま尼文の衆むあつるたちな
ど。さらよか源る人のほありさ満をさうりつれ。
このサのゆのさおぼほ源をさうとときさえあへ
り僧都さう源もあま源れなよ因縁のちさうりよて。かふるほさ
はるがらいとむづ源さう源のゆのさあ源のよさう
ま源れさひはらん源とさう源よいとさむ源あるさ源さ源とて
めお源のさひ源さ源のさ源あ源をさ源ら源さ源ら源ちよ源知
でもさくあれとん源のひて源あ源のほ源ありさ満源よりか
ま源さう源のさ源あれさ源どのほ源さ源は源あ源の源人源乃
ほ源よ源あ源て源お源ら源ま源せ源よ源と源き源こ源ゆ源れ源を源う源ち

のうらみと○うらうらな
づきと少一思案一々
へ○ひびきあそびよ
めゑのいのふよめ云
ふは上離遊びよ画
かきよふよめは源
之とて慕ひ仕へるよ
とてこれ後よ源の本
甚よたちよふ仗業之
四小一節

うなづきていよいよありなるとおぼへたり。ひ
ひなあそびよめゑのいのふよめ源氏のまことと
つくりあて。きよらたまるきぬまきせうづきよめよ
三小段の才八節之。くく別進を惜みなるさう。源内裡
よゆりのふよめ。是迄を三小段落とす。さうか山のといは
一段よて全く終りたれど。は段源内裡
は上上の傳の序のめきよめ。天ハ才八節ゆよめあり
のそ。ひごらの源物語などぞえぬよめいといさうおと
ろくよめたり。とてゆいといとおぼへたり。ひごらの
たうとありけるよめなどよめせしきよめいといさう奏し
のふハあそびなりなどよめなまらぶきよめよめをあれ
おとをひのらうハはめりて。おぼやけよまろくめき

四小一節
大玉殿源をほ迎よ
と思ひのつれど○
おのびたる思ありき
よ云く源の思ひの思
ありきよ大玉のおい
さんるいどごとと遠意
あてと○のどやあ
よ一二日云く大玉
お方よては休息ある
ごとと源をほひのふ
へ○刻つらうハ云く
源を強よのせなりて
ひは奥の方よ乗よ
ふと○殿よめあり
まむらんと大玉殿
夢上の方よ源のお
ひまむらんと
用をて源のえく

れざりけるよめとありの思をせたり。四小
才一節之。源帝よ源物語ありて。大玉殿の思あり
か山の思と細く奏しよめ。おぼよの思ありあひひ
ひてほむよめと思ひ強つれど。のびたる思あ
りきよいあごと思ひをありてあるのどやよ一二
日うちやまらぬよめとて。やあてはおろつあふまら
らんとやめい。源の思ありおぼよ思ひ強つれどひあされて
まあてよめい。大玉殿の思あり源を強よのせなりて
て。おづらうハひきいりてあてまらまら。あてあ
しづきやえぬ。左大玉の
さあそよめい。源の思ありおぼよ思ひ強つれどひあされて
さあそよめい。源の思ありおぼよ思ひ強つれどひあされて

又のいぬ間立流は
 修繕したまへ○此の
 のちひらくれて例の
 通り恥ぢがらうと
 ○あらう志でござり
 のへりヤットノコトデ
 葵上源の方へござり
 のへる○たゞるま
 かきたるまゝに葵上
 の勤まも志のいぬ
 さつちを云へ画まか
 る姫とのやうに
 居られて容易は身
 動あゝも志のいぬと
 是はあまうよあ
 かゝげるまを云へ
 ○をうらうちいら
 へはついで源お山の物
 語など聞あせんは葵
 のおれ志あつて問

しまきらん。とらづのひーのひて。うらうちいら
 ぬほど。うらづおのうてあまのまきまのらひ。よろ
 づをうのへり。女笑れ。ひのまひあつてと。
 みよもいぞ。おれを。おと。せちよまきまのひ
 て。あらう志でござり。たゞるま。葵上のまきま
 のひあまきま。れやうよまきま。あつて。うらうちいら
 ろき。うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら
 ば。源のうらうちいら。うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら
 まきま。えんよ。いひあつて。をうらうちいら
 へはついで。源お山の物。語など。聞あせん。は葵。の。おれ。志。あ。つ。て。問

ひあへ。うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら
 へはついで。源お山の物。語など。聞あせん。は葵。の。おれ。志。あ。つ。て。問

うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら
 なまきま。えんよ。いひあつて。をうらうちいら
 ろき。うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら
 ば。源のうらうちいら。うらうちいら。うらうちいら。うらうちいら
 まきま。えんよ。いひあつて。をうらうちいら
 へはついで。源お山の物。語など。聞あせん。は葵。の。おれ。志。あ。つ。て。問

めしう「俗ニ氣ヲ元セ
又さし」いふまじしよの
よのるの風かうしう
めしうとあるよと照
せり、源の人の影、まの
たきさとりなり

四小ノ第四節

さかかちらぬくまは
まの源の好むの心のか
幼き人よかかへるをい
ふん○くじりくか
ほ一のふまは源の懸
よのわふまは源の懸
おほふこのほありさ
源の平生のさへ
○つぎぐ「方便
んむラレウん○つぎ
りるま」メツソウナ
上をさなけれバかや
の源のふむけを

ワウナとく思ふん
○あさの山の影古今
序は源の影古今
ゆる山の影あさ
ハんをさあ思ふん
とあり、よまをま
づをだまとあふま
ようて古今を序を
ひよせたるん、あけ
るるれハ影さへ
ゆるの影の方よ
せたり、まハ源を
を浅くハ思ふぬを
など懸離れても
る一のふまを○く
みそめてのさくや
しどぞ汲をめてける
浅けれバ袖のさぬる
る山の井の影とある
をとらて、乃の句を

らくるどの影ひきらる性光さかみらぬくはなま
はらみれ。さざらりいさけさかたかきけしひを。
ロクニ見ネドモまの影をぬきま。いほむをぬきま。まの影をぬきま。
源よりかうはらみあるを信教も。いほむをぬきま。まの影をぬきま。
案内しひいん細くよせうそまてあひあう。さかみらぬくはなまの
影ふさふ。おほふこのほありままなごり。さかみらぬくはなまの
少細ほある人よまてつぎぐさういひけさくれど。いほむをぬきま。
まの影をぬきま。いほむをぬきま。まの影をぬきま。
源のまの影をぬきま。いほむをぬきま。まの影をぬきま。
伊ハシキんまの影をぬきま。いほむをぬきま。まの影をぬきま。
尼まの影をぬきま。いほむをぬきま。まの影をぬきま。
後まの影をぬきま。いほむをぬきま。まの影をぬきま。
文の相まの影をぬきま。いほむをぬきま。まの影をぬきま。
ひて。まの影をぬきま。いほむをぬきま。まの影をぬきま。

とて。まの影の中さるま。いほむをぬきま。
あさあさの山あさみらぬくはなまの影をぬきま。
けさるるらん。いほむをぬきま。
尼くみそめてくや。いほむをぬきま。
からやあげをぬきま。いほむをぬきま。
少細ゆとの影をぬきま。いほむをぬきま。
尼て京の影をぬきま。いほむをぬきま。
源のあるをぬきま。いほむをぬきま。
叙せり。是迄を四小段落と。いほむをぬきま。
は葵上をとを取り出たる。葵の影をぬきま。
むいぬより。源をぬきま。いほむをぬきま。
扱を志し。いほむをぬきま。いほむをぬきま。

源氏物語講義

ころあは

ハ京上の尼矣ハ病氣
 全快して六条系極の
 里よ出のりあり○お
 れトは海よのりニ
 天宮上ハまじりける
 きとのみまじりて領
 掌一のりぬえ○あ
 べ一ハまじりてもの思
 ひる春のときを思ひ
 びづりひのりえ○月
 のきりき敷花多
 云は思ひしる不雅と
 もあつた六条系極の
 あつりあるべしおま
 みの子をいへるまや
 おぼつるる一とあり
 所息所のものとまじり
 ○あれたる家の「尼
 美の里ハ六条系極
 の道よあるん○お

よろしうありていでぬひよりなり。京の^{六条系極の邸}はせしむ
 たづめて^{源より}とまじりてのせうそなどあり。おれ
 さはものもあることこりたまうちよ^{七月廿二}は月ころ
 ハあり^{異事}一ハまじりてものぬひよことく^事なること
 まじりて^{九月廿二}秋の末つもの^源いとものころはそく
 てなげまのふ。月のきりき敷。志のびたるふ
 よらうらうらと思ひまの^源まを。一ぐれめつて
 うちそくぐ。おまをるふハ。六条系極より一よ
 て^{内裡}内よりなれを。まじり^{路遠キ}一と^源なまじり^源なる
 よ。あれたる家のさつちり^木とものありて^木こら

十五号三

按察大納言性光源
 氏よ中より納言大納
 言ハ尼矣の夫ハ京上
 の外祖父ハ○とあり
 ぶべりけるをなむ
 のさなるともまじり
 かくとありせしとく
 訪ふべきものを何
 とてその子を知らせ
 ざり^源一とく○ハゆれ
 てあるれせし性光
 使者を以て中入る
 ○^源ひとかくまじり
 序ならで^源ひとかく
 ぶとありひのふま
 よ中入る○^源ひと
 かくまじり^源ひと
 なるハ女房の初ち
 れど少納言なるべし
 かさつらひ^源ひと

うん^源近たるあり。例の^源はともよをるれぬ^{性光}これ
 なる。故^源按察大納言の家よ侍り。一日の^源めく
 よりよとふらひて侍り^源まは。あの^{尼上}阿まうい
 うよらり^弱ぬひよこれバ。なまじり^源おぼそびとる
 ちて侍り^源とまじりぬ^源ば。あを^源れの^源や。さつち
 べり^源けるを。あま^源なるんともものせざり^源一
 りて^{案内}せうそせま^源このめく^源人いきてある^源せ
 さい。さつち^源と^源たちよりぬ^源こと。い^源を
 あれ^源バ。いりて^源あ^源と^源ふらひ^源よ^源なる^源おま
 せ^源たる^源と^源り^源あ^源お^源ま^源ま^源せ^源い^源と^源さ^源ら^源ひ

源氏物語講義

そのあ

三十四

ぐとちかきうひひん○
このまは海は男女共
とあ美と号を筆このあ
まゆあ○とくろさ
むげは何とちかき
げよ俗身のもだつ
などいふと○ひと
へちかきをおくく
みて肌の一重なる
よつみて○ひと
ておぼさるゝとあ
むくよのらぬとあ
思われぬと○ひと
あへは後よの源を
二条路へゆきまら
と思ふを画などあ
るあへちかあれとさ
そひぬと○ひと
くまきとひとのひよか
るよまきとをこのひよ

とおろす。あつちうす色さるるぐまきあらぬバ。
うちちかきつゝあつちうす。この美いとおそろしう。
いのちあらんとさるる戦慄あれて。いとう川さきほたるど
つまも。そろさむげはおぼしき。残らうたくお
ぼえて。ひとをのりをおくくみそ。いかにちか
マタヒツバ
の川ハうそおぼさるる。夜ようちのしらひの
ひて。いさめよをさるる。おぼく。ひく。あえ
びなどさるるあよ。とらよつぐまきとをのひきけ
そひのいとちあつちのき。をさるるまきこちよも
いと。いとう。かおち。ささるる。むつ。か。う。寝

十五号十一

く○みとろぎに身動
く。着付て眠りのぬ
さすの○げよかうま
上は源のよあふよ
てゆくとこのひよ
をげよとまは源の泊
りのらげひいあよさ
びーあんと○ひと
しき福はおちし。京
のお急の年はるるを
よあふま。とま。さ
さやま。い。つ。ん。
七小ノ才五節
うまろめさよ。一丸
きふ。さよ。○ひと
こ。ま。上。の。思。ふ。
○ひと。あ。り。が。は。は。は。の
の。ゆ。さ。の。や。う。よ。人。の
あ。ら。ん。と。○。な。が。め
生。和。の。さ。か。め。ハ。ん。

入ラデ
かいらみどろぎや。のり。夜ひとあふま。あ
い。い。肉の女房。ほの
ふいよ。げよかう。お。せ。ざ。ま。あ。ば。い。よ。ら。ら。ば
そ。の。ら。ま。お。お。く。い。よ。ろ。し。き。福。は。あ。ら。ん。ま。さ
ま。あ。ば。と。ま。め。き。あ。へ。り。七小段の才四節。源京
上を拾て。内帳の内よ入
て。慰めぬ。状。を。是。を。二。条。路。へ。迎。取。り。伏。業。之。は。お
よ。敷。り。あ。れ。て。ま。か。き。ゆ。て。夜。一。夜。風。あ。ま。あ。る。に。
と。ま。よ。つ。く。照。る。と。さ。く。上。は。尼。天。九。月。の。廿。日。の。け。ど
つ。ひ。は。ま。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。と。あ。り。て。三。十。日。は。忌。あ。け。て。京。京。よ
出。の。ま。る。な。れ。バ。今。ハ。十。月。の。少。物。を。め。れ。と。う。ま。あ。め。さ。さ。よ
廿。日。過。之。あ。ま。敷。降。る。ち。か。ま。い。と。あ。ら。う。さ。あ。ら。ぬ。風。ま。い。い。あ。ま。い。た。ま。よ。取
いと。あ。ら。う。さ。あ。ら。ぬ。風。ま。い。い。あ。ま。い。た。ま。よ。取
あ。の。う。い。ぞ。の。ま。も。と。あ。り。が。は。な。り。や。い。と。表。よ。み
と。ま。つ。る。あ。ら。う。さ。あ。ら。ぬ。風。ま。い。い。あ。ま。い。た。ま。よ。取

源氏物語講義

このあ

四十二

をさくあへらるる物。物ぬひいとむむけをひるど
あつは怪光をあへらる
ねえ。○物ぬひいと衣
類など纏ては箱の
用意はるる物也。

八小段五第

あつは怪光をあへらるる物。物ぬひいとむむけをひるど
あつは怪光をあへらる
ねえ。○物ぬひいと衣
類など纏ては箱の
用意はるる物也。

をさくあへらるる物。物ぬひいとむむけをひるど
あつは怪光をあへらる
ねえ。○物ぬひいと衣
類など纏ては箱の
用意はるる物也。

源氏物語講義

このあは

をさくあへらるる物。物ぬひいとむむけをひるど
あつは怪光をあへらる
ねえ。○物ぬひいと衣
類など纏ては箱の
用意はるる物也。

をさくあへらるる物。物ぬひいとむむけをひるど
あつは怪光をあへらる
ねえ。○物ぬひいと衣
類など纏ては箱の
用意はるる物也。

りともすゝめれとて
をまよのせのうへ
よぐぬひしほぞ上
東四節は物ぬひり
るむけをひしとま
首尾と

ハナノ才七節
まごあつちうちうぬ
は上よあつちうち
こよりのせんまご
ふのうちまごあつ
いとねあつちうち
るそ尾よて思な
いのよ一節まご
よのうとてやまご
少細く二条院へつ
ても、寝るよの
ひれて、いのよせ
けんとしてまご
あつちうち○あつち

ぼのねんとう
は父兵衛の迎ひ
んとこのひのめ
今あつちまご
よあつちとあつち
まごのよゆい
かねんとう
そのとねられ
まごのよゆい
泣くのまご
たつち○あつち
はあつちの助
といふまご
おつちうち
まごのよゆい
元よりまご
あつちうち
合ふまご
あつちのめ
源の料の夜

源氏物語講義

このあつち

よぐぬひしほぞ上
携へ持テ。自分モ

まごの夜まごのりぬ
八小段の才六節は源門うちた
うせ肉より入りて寝をまごの

ふまごの二条院
まごのあつちうち
おつちうち

まごのうちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

いとまごのあつち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

まごのあつちうち
まごのあつちうち

細く刻らるる草花
 一 草花の根は土の中
 一 草花の葉は土の上
 一 草花の茎は土の中
 一 草花の花は土の上
 一 草花の果は土の中
 一 草花の種は土の中
 一 草花の根は土の中
 一 草花の葉は土の上
 一 草花の茎は土の中
 一 草花の花は土の上
 一 草花の果は土の中
 一 草花の種は土の中

細く刻らるる草花
 一 草花の根は土の中
 一 草花の葉は土の上
 一 草花の茎は土の中
 一 草花の花は土の上
 一 草花の果は土の中
 一 草花の種は土の中
 一 草花の根は土の中
 一 草花の葉は土の上
 一 草花の茎は土の中
 一 草花の花は土の上
 一 草花の果は土の中
 一 草花の種は土の中

十六号ハ

源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の

源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の
 一 源氏物語の

源氏物語講義

源氏物語

五十四

小恨に嫉むのちよて
 夫婦のりよぬのゆの
 ちも出くををいこ
 ちもろまををあそ
 びふちをらんを○
 くれいいとさよのり
 たるまにまはまのむ
 まめよとまはまのた
 るまにまはまのむ
 ちもろまををあそ
 びふちをらんを○

若紫の巻終

八小段の才十二節に。或上やうりく。なるまのひていしとらう
 たき。扱え。是迄を八小段と云。さては段才十一節ハ。兵ア
 々のか。く。く。く。或上の。い。を。い。の。ち。る。こ。と。ち。ら。ん。と。思。ひ。の。ま
 さ。は。よ。く。文。を。強。び。才。十。二。節。よ。り。て。ハ。或。上。や。う。り。く。く。く。ま
 つ。ま。の。く。く。く。ま。を。叙。し。たり。か。く。く。く。ま。の。く。く。く。ま。を。叙。し
 たるハ。上の才九節十節よ。於て。源の。ま。を。さ。あ。ぐ。よ。なる。け。強
 ふ。ま。の。ま。を。載。せ。たる。そ。尾。よ。て。故。才。九。才。十。節。の。文。を。強。べ
 る。ち。り。



